

常宮神社小誌

常宮神社社務所

目次

一、御祭神	1
二、祭日	2
三、由緒	3
四、御神徳	4
五、総参祭	5
六、国宝新羅鐘	7
七、建造物	9
八、龍頭の松	10

九、不動の滝	11
十、産屋	12
十一、芭蕉の真筆	13
十二、句碑	14

常宮神社小誌

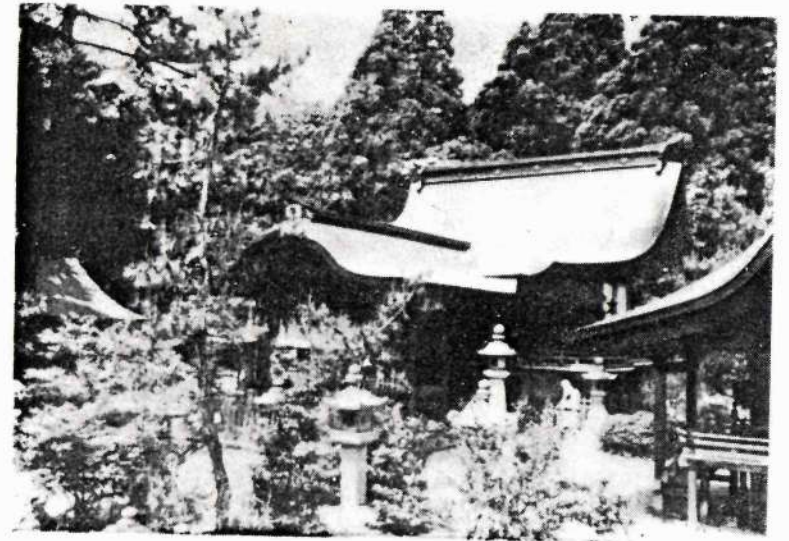
一、御祭神

本殿	天 ^{あめの} 八 ^{やお} 百 ^{ひゃく} 萬 ^{まん} 比 ^ひ 咩 ^め 命 ^{のみこと}
仲神	神功天皇
東殿宮	日本武 ^{たけ} 命 ^{のみこと}
總社宮	応神天皇
平殿宮	玉 ^{たま} 妃 ^め 命 ^{のみこと}
西殿宮	武 ^{たけ} 内 ^の 宿禰 ^{すくね} 命 ^{のみこと}
その他	境内末社 六社あり。

- 2 -

二、祭日

月次祭	師走大袂	新嘗祭	七・五・三祭	風神祭	総参祭	例祭	水無月袂	春祭	祈年祭	節分祭	歳旦祭
毎月十七日	十二月三十一日	十一月三十日	十一月十日、十五日	八月二十日	七月二十二日	七月二十二日	六月三十日	五月十七日	三月十六日	二月三日	一月一日
						十時					
						正午					



三、由緒

謹みて按ずるに、天八百萬比咩命（常宮大神）は上古より、養蚕の神として靈驗あらたかにして、此の地に鎮まり給い、今より約二千年前、仲哀天皇の即位二年春二月に、天皇・皇后御同列にて百官をひきいて敦賀に御幸あり、筒飯の行宮を営み給うた。そののち天皇は熊襲の変をきこしめされ、紀州へ御巡幸せられ、陸路山陽道を御通過、山口県へ向はせ給う。神功皇后は二月より六月まで此の常宮にとどま

り給い、六月中の卯の日に海路日本海をお渡りになり、山口県豊浦の宮にて天皇と御再会遊ばされ給うた。此の由緒を以って、奈良朝時代の大宝三年（千二百七十年前）勅を以って社殿を修造し神功皇后・仲哀天皇・応神天皇・日本武命・玉妃命・武内宿禰命を合わせまつられた。爾来、氣比神宮の奥宮として一体両部上下の信仰あつく、小浜藩政まで氣比の宮の境外の摂社として祭祀がとり行われた。明治九年社格制度によって県社常宮神社となって氣比神宮より独立いたした。

四、御神徳

天八百萬比咩命は常宮大神となえまつり、養蚕の守り神として敦賀は勿論、県内南条郡、又三方郡滋賀県の北部の人たちの信仰をあつめ御神徳をたれ給うた。

神功皇后は三韓征討の前、この地にて御腹帯はらおびをおつけ遊ばされ、のち福岡県宇美市うみにて応神天皇（八幡大神）を御安産遊ばされた故事によって、古くより安産の神として御神徳をたれ給い、広く国内よりの参拝者多し。又、神功皇后は此の地を御船出されるにあたり、海神をまつり海上の安全を御祈願され、はるばる日本海をわたって、遠く朝鮮までも無事航海された由縁により、海上の守り神として漁業者・船主・船乗の深い信仰をあつめている。

五、総そう参のう祭まいり

気比神宮と常宮神社との関係は、神社の起源に実に根づかいものがある。ひもろぎの宮と鏡の宮。奥宮と口の宮。上社かみのやしろと下社しもめのやしろ。気比の神と常宮の神。仲哀天皇と神功皇后。本宮と摂社等、何れもはなす

ことの出来ない神社同志である。おそらく昔より一体両部の神社と見るべきである。さて七月二十二日十一時気比神宮宮司以下神職気比の神々を、船型の神輿にうつしまつり、御座船神宮丸に奉安して御幸みゆきの浜はまより船出する。沿岸の漁業者小船に分乗し、御座船を曳行し、常宮へ海上渡御され、正午本殿にて祭典あり、午後四時御帰還される。当日お供の船をはじめ海上よりの参拝者多く、終日境内はにぎはう。総参そうのうとは此の祭事に神人すべてあずかり参ると言う特殊な祭典の意味であらう。即ち梅雨あけの波風静かな常宮の浜に気比の神々が一年一度の海上渡御をされて、景色のよい夏の日をこよなく楽しみ、且つ神遊び給う御祭で、敦賀の夏祭のさきがけである。

常宮本紀に

三條天皇御製

おほなごや きさひの神の あとたれし

常の宮居は 静けくも見ゆ

六、国宝 新羅の鐘

豊臣秀吉公当社を崇敬し、文祿のいくさに兵たちの武運長久を祈願し、凱旋に際して彼の地朝鮮慶州



の吊鐘一口を若狭藩主大谷刑部義隆を正使として奉納せられた。慶長二年二月二十九日
今から四百年以前のこと。
このつりがねは、龍頭の旗さしに穴をうがち上帯下帯は蓬萊山の図、乳は三段三列で松

- 7 -

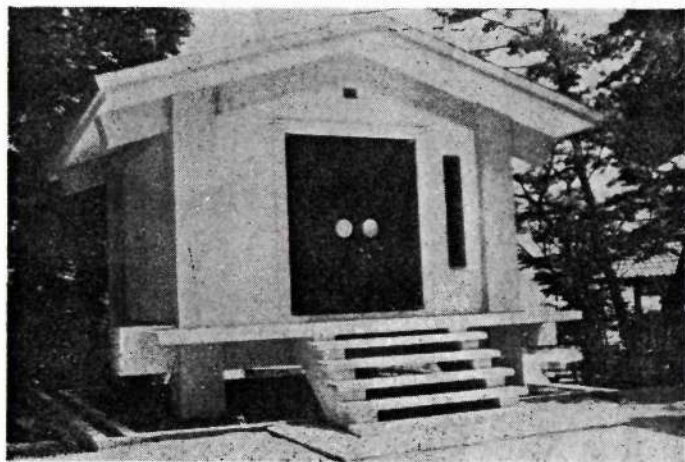
- 8 -

がさを形どっている。正面の天女は鼓をうちながら大空を舞う浮彫になっている。この鐘は黄金を多分に含み、その音色は黄鐘の調にあっている。古代音楽の楽器としても優秀品である。

明治三十三年美術工芸甲種第一等として国宝に指定。明治四十一年大正天皇皇太子の時これを御台覧に供せらる。昭和二十七年十月新国宝に再び指定をうけた。朝鮮の大和七年三月の作。吾国の奈良朝時代白雉二年にあたり、今から千三百二十余年を経ている世界的名鐘である。

朝鮮慶州の鐘はこれより六十年古く、宇佐八幡宮の鐘は

これより五十年新しいと言う。



国宝収蔵庫

七、建造物

(1) 御本殿

越前藩主松平家の寄進、徳川時代正徳二年の建築。御屋根銅板修理昭和三十八年七月。御末社屋根も同じ。

(2) 御拝所

元氣比神宮の中門であつたものを昭和十七年当社に移築した。徳川の初期若狭藩主酒井忠勝公の寄進。

(3) 中門

若狭藩酒井忠直公の寄進。

(4) 国宝収蔵庫

昭和四十一年十二月、国費・県費・市費・氏子等によつて新築。

(5) 拝殿

明治二十年、一般寄附によつて新築。

八、龍頭の松

旧暦正月元旦に此の松に龍宮のともしびがつくと言う伝説の松。雪にうづもれた北陸のそらに光は東

より来ると言う春を待ちわびる心地であ

ろう。



九、不動の滝

境内中央にあり、滝の上方に不動尊がまつられてある。



十、産^{うぶ}屋^や

部落のうちにある。産小屋^ことも言う。氏子十ヶ区の内八ヶ区まで建物が現存している。

この地方の産婦はここでお産をなし、三十日間静養する習慣。

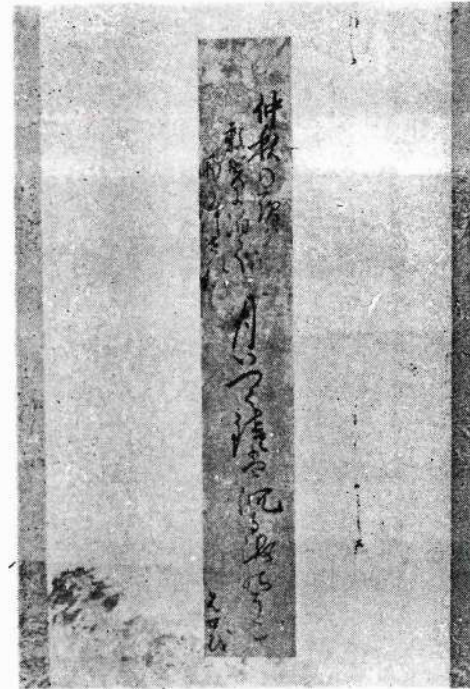
男子禁制。

産室は二室に別れ、白砂を敷き、天井から力綱をつるしてある。起源は古く時代は不明。

十一、芭蕉の真筆 (短冊)

仲秋の夜は
 敦賀に泊て
 雨降ければ
 月いつく 鐘は沈る 海のそこ
 はせを

(宮本宮司所蔵)



十二、句 碑

一、月清し 遊行のもちし 砂の上
 はせを
 松尾芭蕉氣比神宮にて遊行聖人の砂持行事をよみし句。常宮大鳥居前にあり。

二、舟虫の 走りゐる帆を あげにけり
 史斗

(宮本溪月建立)

不動の滝のほとりにあり。

ホトトギス同人、敦賀の俳人宮川史斗の句



平成九年二月一日発行

敦賀市常宮

発行 常宮神社社務所

電話 (0770) 261-0400

敦賀市相生町

印刷 山幸印刷所

電話 (0770) 221-0439

